

【実践報告2】

— 幼保小連携による児童の実態を生かした実践を通して—

1 対象集団の状況

本校は、明治43年に設立され、本年度創立100周年を迎える。通学区域には、まだ多くの自然や田畑が残るのどかな環境ということもあって、子どもたちは素朴で温厚である。家庭のおよそ3割は三世帯同居の世帯で、学校の活動にも協力的である。

児童数は、平成21年度は359人、1年生は2クラス、男子27人、女子26人である。平成22年度は363人、1年生は2クラス、男子29人、女子35人である。1年生の多くの子どもたちが2つの幼稚園と3つの保育園から集まってきている。幼・保・小連絡会での聞き取りでは、環境になじむのに時間がかかる、こだわりが強い、初めてのことが苦手であるなど、配慮を必要とする子の情報が寄せられた。

そこで、幼保小の密接な連携やグループ・アプローチの実践を通して、子どもたちの相互理解を図り、人とかかわることの楽しさ、安心感を体験させていきたいと考えた。

2 実践内容

(1) 幼保小の連携

不適応行動の様態は、授業中の立ち歩きや飛び出し、指示に従わない、けんかをするなど様々であるが、幼稚園や保育園でも「自己中心的な園児」「コミュニケーションがとれない園児」「規範意識の薄い園児」「自制心のない園児」が増えているという認識が高まっている。

不適応行動への望ましい対応としては、補助指導員の配置、学級規模の縮小などがあげられるが、すぐには実現できないと考えられる。そこで、本校では子どもの発達や学びの連続性を確保し、幼児教育から小学校教育へと円滑な接続を図るため、幼保小の連携を密にするとともに積極的に交流を行っている。

ア 就学児との児童交流活動

・ 運動会園児種目への参加

本校への就学を意識付けるため、次年度の就学予定児童を対象に参加しやすい簡単な「かけっこ」を運動会のプログラムに取り入れる。また、参加賞の手作りペンダントを用意して、5・6年生が渡す。

・ 3年生と園児との交流会

3年生の総合的な学習として設定した単元「出身園の子たちとなかよくなろう」で、3年生が出身幼稚園や保育園を訪問して、学校案内をしたり自分たちが考えたゲームで一緒に遊んだりして交流する。

・ 1年生と園児との交流会

1年生の生活科学習として設定した単元「もうすぐ2年生」で、近隣の二つの保育園の年長児が本校を訪問して学校案内を聞いたり、1年生が1年間のできるようになったことの発表会に参加したりして交流する。



【3年生と園児との交流会】



【1年生と園児との交流会】

【3年生と園児との交流会感想】

【3年生児童の感想A】

朝からすごくドキドキしました。分だんの集合場所に行っても、学校に着いてもドキドキしていました。ほいく園には妹がいるのでよけいにきんちょうしました。わたしたちは、「おはじきふくびき」という遊びをしようかしました。「がんばれ」とか「いけー」とか、かけ声をかけました。勝ったチームは、とてもよろこんでくれました。

【3年生児童の感想B】

ほいく園には、知っている子がいるので楽しみだったけど、きんちょうもしました。わたしたちは、1年生の行事をしようかしました。ほいく園の先生が「1年生の行事だって、おぼえておかないとね」と言ってくれました。わたしたちの発表をちゃんと聞いてくれたのでよかったです。ほいく園の子が、楽しんでくれてうれしかったです。

イ 校種間教職員の連絡・交流

・ 幼保小連絡会

小学校1年生の出身園である5園の園長・教諭・保育士が小学校を訪問し、卒園児の授業を参観した後、学級担任と情報を交換し、懇談する。

・ 保育実習体験

近隣の保育園にて、夏季休業中に本校教諭が保育実習体験をする。幼児教育の実態を理解するとともに、保育園での学び方や遊び方、保育士による対応や指導の仕方を把握し、小学校での対応や指導の参考にす。また、就学児の様子を観察し、次年度のスタートカリキュラムの参考にす。

・ 園別幼保小連絡会

教務主任・特別支援担任・養護教諭が幼稚園と保育園を訪問し、学級編制のための情報を交換する。

ウ 平成22年度就学児を迎える取組

月	就学児との児童交流活動	校種間教職員の連携・交流	保護者対象の見学・相談
5	平成21年度 運動会園児種目への参加		運動会案内の配布 (各園を通して)
6		幼保小連絡会 6/29	特別支援教育を求める 親子教育相談 6/11

7			
8		現職教育夏季研修会 8/10 本校教諭の 保育実習体験 8/21	特別支援担任幼稚園保育園訪問
9			
10		保育園運動会見学	特別支援教育を求める 親子教育相談 10/14 就学時検診と説明会 10/27
11			
12		園別幼保小連絡会 12/7～11	
1		3年生担任と園との打合せ	
2	3年生と園児の交流会 2/16・23・26	1年生担任と園との打合せ	お話し会への招待 入学説明会 2/19 特別支援教育を求める 親子教育相談 2/25 特別支援教育を求める 親子教育相談 3/10・23
3	1年生と園児の交流会 3/2		
4	平成 22 年度 通学団上級生による 朝のお迎え活動	授業参観への招待	入学式前事前ガイダンス 4/5 入学式当日の説明会 4/6 PTA総会日学級懇談会 4/22 家庭訪問 4/26～30
5	なかよし遊びの開始 5/7 なかよし清掃の開始 5/25		季節の掲示物づくりの開始
6			学校一日公開（授業参観）6/7

エ 生活科を中心にした「スタートカリキュラム」の作成

幼児教育から小学校教育へと円滑に接続を図るため、入学当初の期間に行う児童が幼児期にしてきた遊び的要素とこれからの小学校生活の中心をなす教科学習の要素を組み合わせ合わせた合科的・関連的学習プログラムが「スタートカリキュラム」である。

本校では、平成 23 年度より実施し、入学直後から 2 学期の始まりまでの期間を特に接続期ととらえ、この時期を中心に幼児教育で経験してきた学び方や遊び方を取り入れ、生活に即した学習場面を設定することを考えている。

- ・ 目標は、「学校が大好きになり、明日も学校に来たいと思える子どもを育てる」である。

- ・ 題材は生活科で、表現は他教科で行う。
- ・ 単元名は、「なかよし いっぱい だいさくせん」とする。
- ・ 学習内容と合科的・関連的教科は、学校探検・アサガオ栽培（生活科・国語科・図工科）、自己紹介（国語科・体育科・図工科）友達何人できたかな（算数科）などである。

(2) 平成 21 年度年間計画

月	学年・学級での活動	関連行事・活動	幼保小連携
入学前			<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 年生と園児の交流会 ・ 3 年生幼保 3 園訪問
4 月	第 1 回適応度調査 「あくしゅ大作戦」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遠足 ・ 1 年生歓迎の会 	・ 児童館連絡協議会
5 月	「集合ゲーム」 「あくしゅであいさつ」	・ ペア学年清掃開始	・ 運動会園児種目参加
6 月	「集合ゲーム」 「ジャンケン列車」 「あくしゅであいさつ」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育相談 ・ なかよし班活動開始 	・ 幼保小連絡会
7 月	「お誕生日会」 「進化ジャンケン」 「あくしゅであいさつ」	・ なかよし遊び	・ 保育実習体験（8 月）
9 月	「集合ゲーム」 「ジャンボジャンケン」 「あくしゅであいさつ」	・ なかよし遊び	
10 月	「集合ゲーム」 「三色鬼ごっこ」 「あくしゅであいさつ」 第 2 回適応度調査	・ なかよし遊び	
11 月	「集合ゲーム」 「こおり鬼」 「あくしゅであいさつ」	<ul style="list-style-type: none"> ・ なかよし遊び ・ 教育相談 	
12 月	「お誕生日会」 「三色鬼ごっこ」	・ なかよし遊び	・ 園別幼幼保小連絡会
1 月	「ケイドロ」		
2 月	「さいころトーキング」	<ul style="list-style-type: none"> ・ なかよし清掃 ・ なかよし遊び 	・ 3 年生幼保 3 園訪問 交流会
3 月	「お誕生日会」 「お楽しみ会」	・ 6 年生を送る会	・ 1 年生と園児の交流会

(3) 平成 22 年度年間計画

月	学年・学級での活動	関連行事・活動	幼保小連携
入学前			<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 年生と園児の交流会 ・ 3 年生幼保 3 園訪問
4 月	「あくしゅであいさつ」 「握手大作戦」 第 1 回適応度調査	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 年生歓迎の会 ・ 通学団上級生による朝のお迎え活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童館連絡協議会
5 月	「集合ゲーム」 「あくしゅであいさつ」 「学校クイズ」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遠足 ・ なかよし班活動（遊び・清掃）開始 ・ 2 年生と探検しよう 	
6 月	「集合ゲーム」 「ジャンケン列車」 「進化ジャンケン」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育相談 ・ なかよし遊び 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼保小連絡会
7 月	「お誕生日会」 第 2 回適応度調査	<ul style="list-style-type: none"> ・ なかよし遊び 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育実習体験（8 月） ・ 幼保小連絡会
9 月	「ケイドロ」 「ジャンボジャンケン」		
10 月	「三色鬼ごっこ」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 運動会 1・6 年生ペア競技 ・ なかよし遊び 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 運動会園児種目参加 ・ 保育園運動会見学
11 月	「こおり鬼」	<ul style="list-style-type: none"> ・ なかよし遊び ・ 教育相談 	
12 月	「お誕生日会」	<ul style="list-style-type: none"> ・ なかよし遊び 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 園別幼保小連絡会
1 月	「さいころトーキング」		
2 月	「いろいろ鬼ごっこ」 「猛獣狩り」	<ul style="list-style-type: none"> ・ なかよし遊び 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3 年生幼保 3 園訪問
3 月	「お誕生日会」 「お楽しみ会」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6 年生を送る会 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 年生と園児の交流会



【1 年生歓迎の会】



【なかよし遊び】



【なかよし清掃】

(4) グループ・アプローチの実践例

ア 集合ゲーム（2クラス合同・ファシリテーター S 教諭）

(ア) ねらい

入学して間もないので、ゲーム自体の面白さよりもゲームを通して、子どもたちの相互理解を図り、人とかかわることの楽しさ、安心感を体験させる。

(イ) 活動の内容

- ・ 体育館に集合し、初顔合わせのあいさつを交わす。
- ・ ファシリテーターが「集合ゲーム」の方法を説明する。
- ・ 体育館全体に広がって、自由に歩き回る。
- ・ ファシリテーターに指示された人数（3人・4人・5人・・・）で集まり、指示された人数が集まったら座る。
- ・ 同様に、タンバリンをたたいた数で集まる。
- ・ 男女混合で、指示された人数で集まる。
- ・ 1組・2組混合で、指示された人数で集まる。
- ・ コアラ・ライオン・ナマケモノ・アフリカゾウ・シロナガスクジラのように、動物の名前の字数で集まる。
- ・ 集合して感想を聞く。
- ・ 終わりのあいさつをする。



【ゲームの説明】

(ウ) 参加者の様子

初めて2クラス合同で行うゲームなので、最初は戸惑う子もいたが、予想以上に男女やクラスの別なく楽しんでゲームに参加する子が多かった。また、積極的に自分から友達とかかわるなど、普段教室の中では見られない行動をとる子もいた。実践後の感想でも、「楽しかったので、また、みんなで遊びたい」という声が多かった。

(エ) 課題

ゲームに参加するよりも、少人数で固まって体育館内を走り回っている男子が何組かいたが、担任の働き掛けによりグループに入ることができた。ゲームの中で担任がどのようにファシリテーターを補助し、子どもたちとかかわるかを考えていかなければならない。実践後に、1年生から「次は、どんなゲームをするの」とか「今度は、いつゲームをするの」と声を掛けられるようになった。ファシリテーターは、普段1年生とかかわることが少ないため、これをきっかけに子どもたちとの関係を少しでも深め、実践がスムーズに行えるようにしていかなければならない。

イ 集合ゲーム・ジャンケン列車（2クラス合同・ファシリテーター S 教諭）

(ア) ねらい

集合ゲームについては、5月と同じ内容で行い、子どもたちのゲームへの参加の仕方を比較する。ジャンケン列車については、学年全体のリレーションづくりを行う。

(イ) 活動の内容

- ・ 体育館に集合し、あいさつをする。
- ・ ファシリテーターが「集合ゲーム」の確認をする。
- ・ 体育館全体に広がって、自由に歩き回る。
- ・ ファシリテーターがたたいたタンバリンの数（5人・6人・7人・・・）で集まり、指示通りの人数が集まったら座る。

- ・ ファシリテーターに指示された動物の名前の字数で集まる。
- ・ 担任の先生に指示された動物の名前の字数で集まる。
- ・ 友達に指示された動物の名前の字数で集まる。
- ・ ファシリテーターが「ジャンケン列車」の説明をする。
- ・ 体育館内を自由に歩きまわり、出会った人とジャンケンをする。負けた人は、相手の肩に両手を置いて、後ろにつながる。つながった後は、別の先頭の人同士でジャンケンをする。負けたらその列の全員が相手の後ろにつながる。同様に行い、最後は一つの輪になる。
- ・ 「ジャンケン列車」のゲーム方法を少し変えることを説明する。
- ・ 体育館内を自由に歩き回り、出会った人とジャンケンをする。負けた人は、相手の肩に両手を置いて、後ろにつながる。つながった後は、別の先頭の人同士でジャンケンをするが、ジャンケンで負けた先頭の人だけが、相手の列の後ろにつながる。
- ・ 集合して感想を聞く。
- ・ 終わりのあいさつをする。

(ウ) 参加者の様子

「集合ゲーム」は、5月に行ったことにより、遊び方を理解し積極的に参加する子が増えた。学級担任があまりかかわらなくても、他の子をリードして人数を調整する子が出てきた。また、タンバリンの音に合わせて、自然にみんなで大きな声で数を数えることができた。動物の名前をファシリテーターだけでなく、学級担任や子どもたち自身に言ってもらったことにより、雰囲気が大変盛り上がった。

「ジャンケン列車」では、ジャンケンに負けると列の後ろについているだけになってしまうため、やる気をなくしてふざける子も目立った。そのため、少し方法を変え、ジャンケンに負けた先頭の人だけが相手の列の後ろにつくことにした。それにより、一つの輪にはならなかったが、ジャンケンをする機会が増え、雰囲気は盛り上がった。

(エ) 課題

時間が長くなると、集中力が続かなくて何人かで集まってふざけてしまう、ゲームの内容が少し変わると指示された内容の理解度に大きな差が出るなど、1年生としては課題も見られた。また、「次は、鬼ごっこがしたい」とか「ドッジボールがしたい」というように、子どもたちから期待する声が多く出されるようになった。しかし、グループ・アプローチがただのゲームになってしまったり、楽しいから早く次のゲームがしたいというだけで終わったりしないようにするにはどうしたらよいかを考えなければならない。

ウ お誕生日会・進化ジャンケン（2クラス合同・ファシリテーター S 教諭）

(ア) ねらい

1学期の誕生日会を開き、4月・5月・6月・7月生まれの子を、学年みんなでお祝いをする。誕生日会のプログラムの中にゲームを入れ、「進化ジャンケン」を行う。ゲームのねらいは、自分が成長・変化していくことに気付く。また、友達も成長する仲間であることに気付く。

(イ) 活動の内容

- ・ 体育館に集合し、子どもたちの代表の司会で開会する。
- ・ 4月から7月生まれの子は、みんなの前へ出る。
- ・ 「ハッピー・バースデー」をみんなで歌う。
- ・ ファシリテーターが「進化ジャンケン」の説明をする。
- ・ 「ゴキブリ」から始め、「カエル→サル→人間」と進化する。同じ生き物の仲間同士でジャン

ケンをして勝つと進化する。負けると、一つ前の生き物に戻る。人間同士でジャンケンをして勝つと「神様」となり終了。

- ・ 4月から7月生まれの子に、プレゼントを贈る。
- ・ 閉会する。

(ウ) 参加者の様子

「お誕生日会」は、学級担任の助けを借りながらも司会・進行を子どもたち自身で行うことができた。お祝いをしてもらう子どもたちもうれしそうであった。

「進化ジャンケン」は、「ゴキブリ・カエル・サル」の動作をしながらジャンケンをするということで恥ずかしがるかと思ったが、男女とも大はしゃぎでそれぞれの生き物になってジャンケンをしていた。普段は、あまり自分を出さない子ども、雰囲気につられて楽しく参加することができた。1・2年生には、楽しめるゲームであった。

(エ) 課題

1学期末ということで、子どもたちにある程度の人間関係が育ってきており、ファシリテーターとしては、1年生の子どもたちの実態や集団の状況を把握してグループ・アプローチのねらいや方法を考えなければならないが、不十分であった。学級担任との情報交換や連携を深めなければ、より効果的なグループ・アプローチはできないと反省した。



【お誕生日会】



【進化ジャンケン】

エ 集合ゲーム・ジャンボジャンケン（2クラス合同・ファシリテーター S教諭）

(ア) ねらい

3回目の「集合ゲーム」であるが、今回はゲーム自体の面白さよりも、「ジャンボジャンケン」のチームづくりをするための導入として行う。「ジャンボジャンケン」は、3人組で友達との触れ合いを楽しむ。

(イ) 活動の内容

- ・ 体育館に集合し、あいさつをする。
- ・ ファシリテーターが「集合ゲーム」の確認をする。
- ・ 体育館全体に広がって、自由に歩き回る。
- ・ ファシリテーターに指示された人数で集まり、指示通りの人数が集まったら座る。

- ・ 最後に指示された人数の3人組で座る。3人になれなかったら、4人組で座る。
- ・ ファシリテーターが「ジャンボジャンケン」の説明をする。
- ・ 3人でチームを作り、「グー」は全員がしゃがむ。「チョキ」は真ん中の1人がしゃがみ、両端の2人が手をあげて立つ。「パー」は全員が手をあげて立つ。
- ・ 対戦相手を決め、何を出すか相談した後、ジャンケンをする。
- ・ 各チーム5枚のゲーム券を持ち、勝ったチームは負けたチームからゲーム券を1枚もらう。
- ・ たくさんのゲーム券を集めたチームが優勝。
- ・ 集合して感想を聞く。
- ・ 終わりのあいさつをする。

(ウ) 参加者の様子

ジャンケンをするときに「グー」「チョキ」「パー」の何を出すか3人で相談しなければならないが、子どもたちなりにゆずり合ったり、一人がリーダーになって意見を調整したりと、コミュニケーションを図りながら遊ぶことができた。ジャンケンをするときにも、最初のうちは3人の息が合わなかったが、遊びを進める中でタイミングが合わせられるようになった。

(エ) 課題

多くのグループは、コミュニケーションをとりながら遊ぶことができたが、一人が主導権を握ってしまい、他の2人はジャンケンの動作をするだけというチームも見られた。ファシリテーターや学級担任がそのチームにかかわりながら、アドバイスをした。最後の感想で、鬼ごっこをしたいという希望が子どもたちから大変多く出されたので、次回は子どもたちの希望に沿って「鬼ごっこ」をする約束をした。

オ 三色鬼ごっこ（2クラス合同・ファシリテーター S教諭）

(ア) ねらい

1年生を3つのチームに分けて鬼ごっこをするということで、1チームの人数が多くなる。小グループでの遊びではなく、大勢の友達と触れ合い、協力して遊びを楽しませる。また、新しい人間関係を発展させるきっかけにする。

(イ) 活動の内容

- ・ 体育館に集合し、あいさつをする。
- ・ 集合ゲームをしながら、最後に3人組をつくる。
- ・ 3人組で集合し、赤チーム、青チーム、黄緑チームに分ける。
- ・ 赤・青・黄緑のビブスを配る。
- ・ ファシリテーターが「三色鬼ごっこ」の説明をする。
- ・ 赤・青・黄緑チームの陣地を指定する。
- ・ 1回戦は、赤→青、青→黄緑、黄緑→赤を捕まえる。捕まったら、相手の陣地に連れて行かれる。味方がタッチすれば、逃げるができる。逃げ切った子の多いチームが勝ち。
- ・ 1回戦終了。成績発表をして、互いに拍手をする。
- ・ 2回戦の前に、チームで作戦会議をする。
- ・ 2回戦は、黄緑→青、青→赤、赤→黄緑を捕まえる。
- ・ 2回戦終了。成績を発表して、互いに拍手をする。



【三色鬼ごっこ】

- ・ 集合して、感想を聞く。
- ・ 終わりのあいさつをする。

(ウ) 参加者の様子

体育館の中を所狭しと走り回る子どもたち。ねらいを定めて敵を追いかける子の後ろに迫る敵の姿。追いかけながら、その一方では逃げなくてはならないところが、三色鬼ごっこの面白さであるが、1回戦目は理解できていないようで、むやみに走り回るだけで面白さも半減してしまった。そこで、2回戦の前に、追いかけながらも敵を見ること、陣地を守ること、捕まった子を協力して助けることなどをアドバイスして、作戦会議を開かせた。2回戦は、運動量だけでなく、助けたり助けてもらったり、協力して敵を捕まえたりと、三色鬼ごっこの楽しさを味わえたようで、子どもたちも満足した様子であった。

(エ) 課題

1年生には、ルールが分かりにくく理解度に大きな差があった。そのため、1回戦はただ走り回るだけの遊びになってしまった。2回戦の前にルールを再確認し、チームで作戦会議を開いたことが、2回戦の盛り上がりにつながった。1チームの人数が多いので、作戦会議とは名ばかりであったかもしれないが、チームの団結や友達同士のコミュニケーションをとるということでは、効果があった。

カ あくしゅであいさつ（各クラス・ファシリテーター 担任）

グループ・アプローチ終了後、教室で「あくしゅであいさつ」を行った。「あいさつをしてあくしゅ」「好きな食べ物を言ってあくしゅ」「好きな遊びを言ってあくしゅ」「ジャンケンをしてあくしゅ」など、子どもたちが飽きないように進めた。

終わった後は、カードに名前、あいさつした人数を書かせ、進んであいさつができたなら「ニコちゃんマーク」に色を塗り、進んであいさつができなかったら「残念マーク」に色を塗らせた。毎回、ほとんどの子どもたちが進んであいさつができ、「ニコちゃんマーク」に色を塗ることができた。このことから、グループ・アプローチの遊びや「あくしゅであいさつ」の時間が楽しく過ごせたことが分かった。

2学期から、カードの振り返り欄に感想が書ける子は書かせたところ、「みんなと遊べて楽しかった」「また、みんなと遊びたい」「ゲームがすごく楽しかった」「次のゲームを楽しみにしているよ」「先生と遊べて楽しかった」など、多くの子どもたちから期待通りの反応が返ってきた。あいさつをした人数については、1年生ということもあり人数を把握できていなかったり、ふざけてありえない数を書いたりするため、4月から10月までの特徴や変化を捉えることができなかった。

そのため、平成22年度については、あいさつをした人数については、書かなくてよいことにし、進んであいさつができたかどうかの確認のため「ニコちゃんマーク」あるいは「残念マーク」に色を塗らせた。また、7月からは振り返り欄に感想が書ける子は書かせた。5月・7月とも進んであいさつができなかったという子が1名いたが、ほとんどが積極的に友達とあいさつを交わすことができた。感想も半数近くが書くことができた。「楽しかったので、また遊びたい」「また、今度も楽しくゲームをしたい」「すごく楽しかったから、次は鬼ごっこをしたい」「今度は、宝探しをしたい」「ゴキブリからカエルになったけど、またカエルにもどったよ」など、1年生なりにゲームを振り返ることができた。振り返り欄に簡単に感想を書かせることは、子どもたちの行動や気持ちを把握する上で効果的であった。

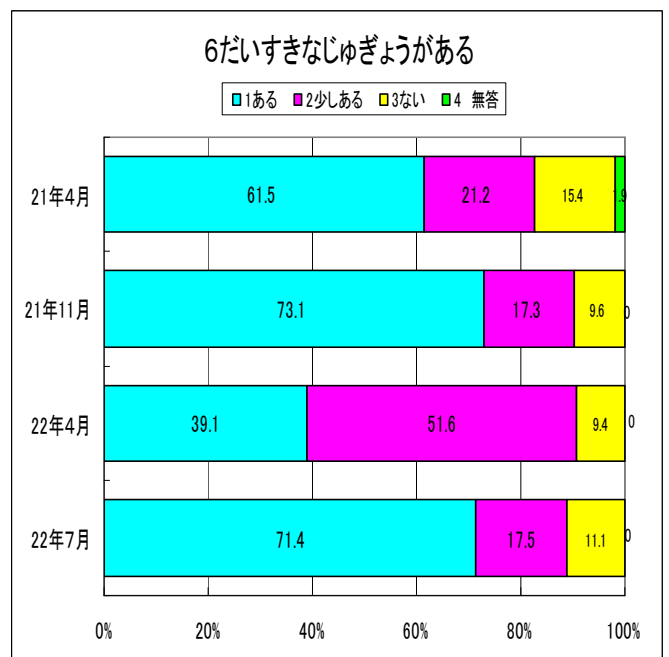
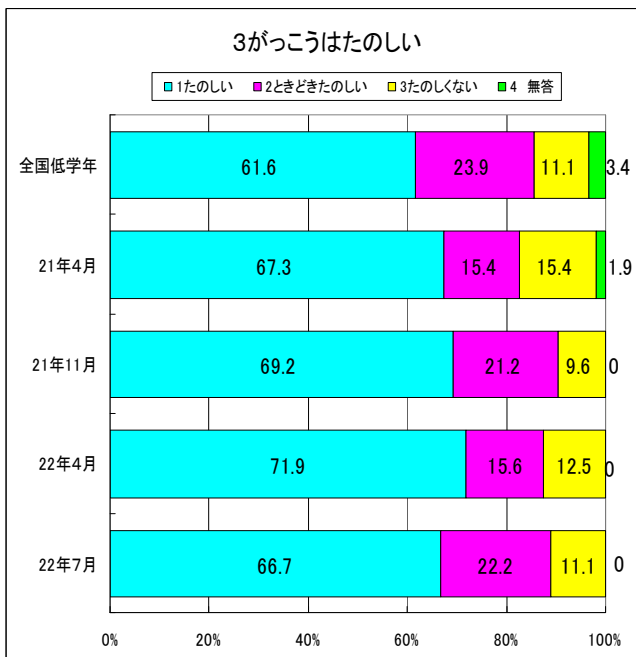
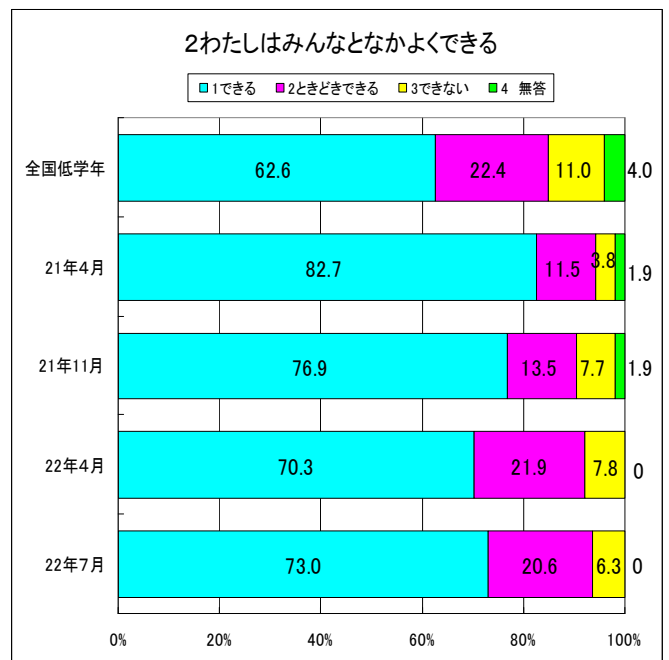
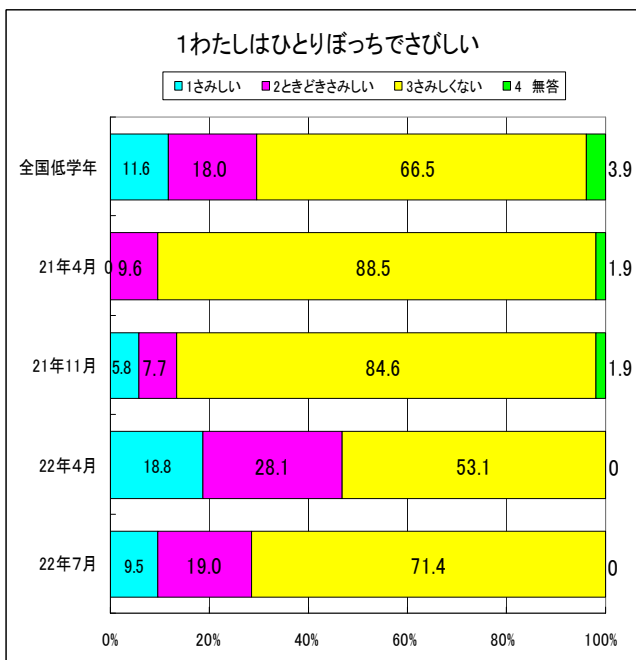


【あくしゅであいさつの感想】

3 結果と考察

(1) 適応度調査より

【適応度調査結果】



平成 22 年度に実施した「適応度調査」のアンケート結果を 4 月と 7 月で比較したところ、子どもたちに次のような変容が見られた。

「1 わたしはひとりぼっちでさびしい」について、4 月は「さびしい」と「ときどきさびしい」を合わせて半数近くおり、特に今年度はその割合が高かった。しかし、7 月には 3 分の 1 以下に減少した。また、「2 わたしは、みんなとなかよくできる」についても、4 月と比較し 7 月は「なかよくできる」がわずかではあるが、割合が高くなった。入学当初の小学校生活は、子どもたちの心に大きな不安やストレスを与えている。また、子どもたちは 2 つの幼稚園と 3 つの保育園から集まってきており、親しい友達も少ないことが、孤独感にもつながっていると考えられる。そこで、入学して早い時期に受容・共感し合える人間関係、仲間づくりを行うための働き掛けが必要である。子どもたちの中には、友達に声をかけることさえ苦手な子もいる。グループ・アプローチにより、人とかかわる楽しさを味わい、安心感や連帯感が得られるようになるのではないか。1 年生にとって、遊びの中で体を動かし、友達と触れ合うことは、学校生活に適応する上で有効な手段といえる。

「3 がっこうはたのしい」について、4 月と 7 月を比較すると、全体としては「たのしくない」の割合がわずかではあるが低くなり良かったが、「たのしい」の割合がやや低くなるという結果にもなった。学校生活に慣れるに従って、自己主張が強すぎて友達とトラブルになったり、小グループで人間関係が固定化したりするなど、集団の中での人間関係等に問題が生じていると考えられる。しかし、グループ・アプローチをきっかけに、不満はあっても友達の意見に合わせたり、少人数で遊んでいる子が誘い合って遊んだりできるようになった。また、孤立している子に声をかけて仲間に入れるなど、友達関係のハードルが低くなった。

「6 だいすきなじゅぎょうがある」について、「ある」と答えた割合が、7 月は 4 月の約 2 倍になるという良い結果が得られた。これは、幼保小の連携を大切にし、遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から、教科学習が中心の小学校教育への移行が円滑に行われている結果と考えられる。

(2) 抽出児の変容より

21 年度抽出児の A について、母親から「友達とあまり交わって遊べない」「嫌なことをされても、嫌と言えない」「話の内容を理解できず、途方にくれる」というような心配が寄せられていた。4 月の「あくしゅであいさつ」では、あいさつができた人数が 3 人ということでクラスで一番少なく、残念マークに色が塗られていた。当初は、グループ・アプローチにも進んで参加できず、みんなが楽しく遊んでいるのを見て、自分も遊んだという気持ちになっているようであった。しかし、グループ・アプローチを重ねることにより、深まりのあるコミュニケーションとまではいかないけれど、友達に自分から話しかけて遊んだり、友達に声をかけてもらおうと笑顔を見せたりするようになった。クラスでも、友達ができて運動場で遊ぶようになり、友達に笑顔で接する姿が見られるようになった。また、友達に嫌なことをされると「嫌だ、やめてよ」と言えるようになった。学級担任にもよく話しかけるようになり、一層コミュニケーションが図れるようになった。

しかし、2 年生になりクラスの友達が変わったため、周囲とのコミュニケーションが円滑にとれているとは言い難い状況である。また、嫌なことをされても拒絶するような行動がとれない、単独で行動していることが多いなど、心配していた面が再び表れている。担任が、個別の支援計画を立てて実行しているが、1 学期当初はどの学年でもグループ・アプローチを取り入れ、多くの友達とかかわることが有効であると考えられる。

4 今後の課題

幼保小の連携を密接にし、情報を共有することで、子どもたちの実態や適性を考慮しながら、グループ・アプローチを実践することができた。そして、実践を通して子どもたちは人とかかわることの楽しさ、安心感を体験することができた。

今回、グループ・アプローチを特別な時間を設けて実践したが、今後、1年生だけでなく他学年にも広げていけたらと思う。そのためには、学級活動や道徳等の年間指導計画に組み込むことやファシリテーターとしての学級担任の育成についても考えていかなければならない。また、子どもたちの実態に合ったグループ・アプローチの方法や内容を選択したり、内容によって時間設定を考えたり、グループのメンバー構成やグループサイズを工夫したりすることも課題であると考えている。

本校では、23年度から1年生に対して、幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図るための「本校スタートカリキュラム」を設定し、実践する予定である。このねらいとしては、子どもの発達段階を踏まえ、体験活動や学習活動を意図的に設定すること。幼児教育との連携を図りながら、学校生活に対して子どもが安心感を抱くようにすること。新しい集団の中で人間関係を築いたり、新しい集団の中でのルールを受け入れたりしながら、その環境の中で自己を発揮できるようにすることである。本校の「スタートカリキュラム」が、さらに小1プロブレムの問題解決につながればと考えている。